

報 告

発達障害児のきょうだいに対する問題行動の実態

鈴木 俊介¹⁾, 安藤 智子²⁾

〔論文要旨〕

発達障害児からきょうだいに対する問題行動の実態を明らかにすることを目的として質問紙を作成し、発達障害児を養育する1,980名の保護者に対して送付した。3～19歳の発達障害児の母親289名（14.6%）が記入した回答の内容を解析した。きょうだいの約3/4が言語的攻撃、身体的攻撃および迷惑行為の少なくともどれか一つの対象となっていた。6～12歳の発達障害児に他の年齢層より身体的攻撃が多かった。発達障害児による言語的・身体的攻撃は、きょうだいの年齢が13歳以上の場合は少なく、きょうだいが発達障害児より年下の場合が多かった。

Key words : 発達障害, きょうだい, 言語的攻撃, 身体的攻撃, 問題行動

I. 諸 言

近年、発達障害に対する社会的関心の高まりを受け、発達障害児を養育する親や同居する定型発達のきょうだいの経験する困難が注目され、彼らへの支援についても、その必要性が指摘されるようになってきた。だが、きょうだいが発達障害児との生活の中で、実際どのような経験をしているのか、青年期後期～成人のきょうだい過去の振り返る形式の回顧的研究はあっても¹⁻³⁾、発達障害児ときょうだいとの具体的なやりとりについて同時的な調査を行った研究は数少ないのが現状である。

一般に障害児がきょうだいに影響を与える場合、障害児ときょうだいとの間に生じる具体的な相互作用による直接的な影響と、障害児の存在によってきょうだいが経験する不利益や負担などの間接的な影響が考えられる⁴⁾。先行研究では後者の間接的な影響を扱ったものが多く、障害児が存在することによって、きょうだいが親の注目を浴びにくいこと⁵⁾、障害児の世話や

介助の義務を負うこと^{6,7)}、親から過剰に期待され努力を求められること⁸⁾、通常の同胞関係を経験できないこと⁵⁾、両親のストレスが増大し家庭不和が生じやすいこと⁹⁾、周囲から障害児の同胞だというレッテルを貼られること^{5,10)}、などが指摘されている。

一方、障害をもつ児童からきょうだいに向けられた直接的な行為の影響を見た研究は、発達障害に絞って見るときわめて数が少ない¹¹⁾。わずかに Harpin が、注意欠如多動性障害：Attention Deficit Hyperactivity Disorder（以下、ADHD）の子どもが家族に与える影響について論じた総説において、ADHD児—きょうだい関係を扱った研究への注目がこれまで限定的であったと指摘している¹²⁾。

わが国で障害児からきょうだいに向けられる問題行動が調査研究の対象になる場合、どのような家庭でも生じ得る「きょうだいげんか」という文脈で扱われるか¹³⁾、あるいは治療的介入の対象となる「暴力行為」という文脈で扱われることが多く^{4,14,15)}、日常的に反復される発達障害児からのいじわるや小暴力に焦点が当たることは少なく、あっても事例の提示にとどまっ

Problem Behaviors by Children with Developmental Disorders towards Their Siblings

[2749]

Shunsuke SUZUMURA, Satoko ANDO

受付 15. 7. 6

1) 東京都立大塚病院児童精神科 (医師 / 児童精神科)

採用 16. 9. 6

2) 筑波大学人間系 (臨床心理士)

ていた⁴⁾。発達障害児からきょうだいに向けられた問題行動は、きょうだいの情緒・行動上の適応のみならず家族システム全体の安定に大きく影響を与えるものと考えられ、発達障害児と家族を援助する際に考慮すべき重要な要因である。本研究の目的は、発達障害児からきょうだいに向けられた問題行動の内容と頻度の実態を明らかにすることにある。

II. 対象と方法

1. 調査対象

2009年10月1日～2014年10月31日の5年1か月間にA病院児童精神科を受診した外来患者のうち、発達障害児(ICD-10¹⁶⁾で主診断がF7〔精神遅滞〕、F8〔心理的発達の障害〕にコードされる患者全員と、F9〔小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害〕にコードされる者のうちF90〔多動性障害〕、F91〔行為障害〕、F92〔行為および情緒の混合性障害〕、F95〔チック障害〕に該当する患者) 1,980名の保護者を対象に調査を行った。なお、複数の発達障害が併存する場合は、児童の情緒・行動上の問題に強く影響を及ぼし、保護者に児童精神科への受診を促したきっかけとなった障害を主診断とした。

2. 調査方法

依頼状、研究目的と方法および倫理的配慮を記載した研究説明書、質問書記入の手引き、同意書、自記式質問紙と返信用封筒を自宅に送付した。1,980名全員に連番を割り当て、各々の質問紙に対応する番号を記載した。連番と患児の個人識別情報の対応表は研究代表者が厳重に管理した。自由意思による返信用封筒の投函によって質問紙を回収した。

3. 質問項目

i. 対象者の属性

記入した保護者の発達障害児から見た続柄・年齢層・勤務形態、発達障害児の年齢と性別、きょうだいの年齢と性別、同胞数について回答を求めた。

ii. 子どもの強さと困難さアンケート Strengths and Difficulties Questionnaire (以下, SDQ) の Total Difficulties Score (以下, TDS)

SDQは子どもの情緒・行動上の特徴を評価するための尺度で、保護者が自分の子どもについて記入する自記式の質問紙である¹⁷⁾。子どもの行動を表す25

の短文に対して「あてはまる(2点)」、「まああてはまる(1点)」、「あてはまらない(0点)」の3件法で回答を求める。5項目ずつ合算して5つのサブスケール得点(「情緒」、「行為」、「多動」、「仲間関係」、「向社会性」)を算出する。このうち「情緒」、「行為」、「多動」、「仲間関係」の4サブスケール得点を加算しTDSを算出する。合計が0～12点はlow need, 13～15点はsome need, 16～40点はhigh needと判定される。4～12歳の児童を対象にMatsuishiらが作成した日本語版では十分な信頼性が示されている¹⁸⁾。また、Moriwakiは7～15歳の児童を対象に行った調査において、TDSの高い内的一貫性、十分な評者間信頼性、高い検査一再検査信頼性、高い基準関連妥当性を報告している¹⁹⁾。

iii. 発達障害児のきょうだいに対する問題行動

発達障害児にきょうだがいる場合、きょうだい間の年齢差が大きいほど、きょうだい関係は親密になり葛藤が少なくなることが指摘されていることから^{21,22)}、母親に一番年齢の近い者を選んでもらい、発達障害児からきょうだいにに向けた問題行動の頻度について、保護者に回答を求めた。

質問項目の選定を目的として、10～15歳の発達障害児を養育する10名の母親(37～50歳)に対して半構造化面接を施行した。面接は発達障害児の親ときょうだいが経験する心理的困難に関する量的研究の予備的研究として施行したものである。インタビューガイドでは、①発達障害児のきょうだいに対する不適切な言動・行動に対する親・きょうだいの対処、②両親の発達障害児およびきょうだいに対する differential parenting (親が各々の子どもに対して育て方を変えること)、③主たる養育者へのソーシャル・サポートの3点に焦点を当てた。

母親一人当たりの面接時間は58.6分(レンジ39～90分)であった。逐語録を参照して意味ある文章ごとに区切って素データを作成した。素データを記入したカードを筆者である鈴木、安藤と心理学系修士号取得者の3名で読み込み、KJ法²⁰⁾を援用して76の小カテゴリーに統合・分類し、これをさらに26項目の中カテゴリーに分類した。このうち発達障害児のきょうだいへの不適切な言動・行動の具体的なありように関わるものは、小カテゴリー「発達障害児の問題行動によってきょうだいは迷惑をこうむる(言語的攻撃)」、「発達障害児の問題行動によってきょうだいは迷惑をこう

むる（身体的攻撃）」および「発達障害児はきょうだいの嫌がることを繰り返す（迷惑行為）」であり、あわせて中カテゴリ「発達障害児のきょうだいへの問題行動」を構成した。

具体的な質問項目として、言語的攻撃として「ばかにする」、「からかう、いじわるを言う」を、身体的攻撃として「押す、小突く」、「たたく、ける」を、迷惑行為として「いやがることをする（例：勝手にきょうだいの部屋に入る、きょうだいの持ち物を許可なく使う）」を、逐語録を参照して選び出し、それぞれ「ない（0点）」、「あまりない（1点）」、「少しある（2点）」、「かなりある（3点）」、「すごくよくある（4点）」の5件法で回答を求めた。

iv. 分析方法

比率の比較には χ^2 検定を、2群の平均値の比較にはウェルチのt検定を、3群以上の平均値の比較に一元配置分散分析を用いた（多重比較にはTurkey法を用いた）。統計解析には統計処理用ソフトウェアSPSS ver. 22（日本IBM社）を使用し、有意水準は5%とした。

v. 倫理的配慮

研究説明書には、研究協力は自由意思であり拒否した場合も不利益のないこと、患児の情報は研究用に固有の通し番号を付与して処理されること、固有の通し番号と個人識別情報の対応表は研究代表者によって厳重に保管されること、調査結果が学会発表や専門誌に投稿される場合も患児並びに保護者を特定する情報が

表1 母親の属性

		N=289	
		人数	%
年齢層	20～29歳	2	0.7
	30～39歳	87	30.1
	40～49歳	182	63.0
	50～59歳	18	6.2
就業形態	フルタイム勤務	73	25.3
	パートタイム勤務	92	31.8
	就業せず	121	41.9
	記入なし	3	1.0
同居するパートナー	あり	254	87.9
	なし	35	12.1

公表されることはないことを明記した。なお、本研究は東京都立大塚病院倫理委員会の承認を得て実施した。

III. 結 果

1. 対象者の属性

宛先不明で戻ってきた130名を除いた1,850名のうち、453名より回答を得た（回収率24.4%）。記入者は父親16名（3.5%）、母親436名（96.3%）、祖母1名（0.2%）であり、母親以外の標本数が極めて少なく分析に適さなかったため、今回は母親が記入したケースのみを解析の対象とした。436名中、発達障害児にきょうだいがいたのは289名であった。記入者である母親、発達障害児、母親が選んだきょうだいの属性をそれぞれ表1～3に示す。発達障害児の年齢は男女間で有

表2 発達障害児の属性

年齢層	男子 (n=226)		女子 (n=63)		χ^2	df	p
	人数	%	人数	%			
3～5歳	12	5.3	7	11.1	3.60	2	0.17
6～12歳	159	70.4	38	60.3			
13歳～	55	24.3	18	28.6			

表3 きょうだいの属性

年齢層	男子 (n=138)		女子 (n=151)		χ^2	df	p
	人数	%	人数	%			
0～5歳	36	26.1	36	23.8	2.37	2	0.31
6～12歳	71	51.4	69	45.7			
13歳～	31	22.5	46	30.5			
発達障害児との関係	兄	49	17.0				
	姉	66	22.8				
	弟	90	31.1				
	妹	84	29.1				

意差は認められなかった。きょうだいの年齢分布は男女間で有意差は認められなかった。

2. 発達障害児の全般的な情緒・行動上の問題

TDS 得点を表4に示す。男女の平均値に有意差は認められなかった。low need (得点0~12), some need (得点13~15), high need (得点16~40) の分布について男女間に有意差は認められなかった。

3. 発達障害児のきょうだいに対する問題行動

i. 得点の分布 (表5)

発達障害児からきょうだいに向けられた問題行動それぞれの得点分布を表5に示す。各々の質問に対して「少しある」または「かなりある」または「すごくよくある」と答えた人数を合算すると、「ばかにする」が127名 (43.9%), 「からかう, いじわるを言う」が144名 (49.8%), 「押す, 小突く」が135名 (46.7%), 「たたく, ける」が119名 (41.2%), 「いやがることをする」

表4 発達障害児の行動上の問題

	男子 (n=226)		女子 (n=63)		t	df	p
	M	SD	M	SD			
TDS (SDQ)	17.4	6.3	18.1	7	0.66	91	0.51
	人数	%	人数	%	χ^2	df	p
0~12点 (low need)	51	22.6	14	22.2	1.15	2	0.56
13~15点 (some need)	37	16.4	7	11.1			
16~40点 (high need)	138	61.0	42	66.7			

TDS : Total Difficulties Score, SDQ : Strengths and Difficulties Questionnaire

表5 問題行動の得点分布

	ない		あまりない		少しある		かなりある		すごくよくある		記入なし	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
言語的攻撃												
ばかにする	109	37.7	53	18.3	64	22.1	27	9.3	36	12.5	0	0.0
からかう, いじわるを言う	99	34.3	44	15.2	64	22.1	34	11.8	46	15.9	2	0.7
身体的攻撃												
押す, 小突く	113	39.1	41	14.2	63	21.8	31	10.7	41	14.2	0	0.0
たたく, ける	121	41.9	49	17.0	60	20.8	28	9.7	31	10.7	0	0.0
迷惑行為												
いやがることをする	80	27.7	42	14.5	67	23.2	44	15.2	56	19.4	0	0.0

表6 発達障害児の年齢層と問題行動

	発達障害児の年齢層									
	1 「5歳以下」 (n=19)		2 「6~12歳」 (n=197)		3 「13歳以上」 (n=73)		F	p	多重比較	
	M	SD	M	SD	M	SD				
言語的攻撃										
ばかにする	0.8	1.3	1.6	1.4	1.2	1.4	3.59	0.02		
からかう, いじわるを言う	1.2	1.6	1.7	1.5	1.4	1.4	1.81	0.17		
身体的攻撃										
押す, 小突く	1.8	1.5	1.6	1.5	1.1	1.3	4.20	0.02	2>3	
たたく, ける	1.7	1.5	1.4	1.4	0.9	1.2	4.87	0.01	2>3	
迷惑行為										
いやがることをする	1.9	1.5	1.9	1.5	1.6	1.4	1.78	0.17		
全般的な情緒・行動上の問題										
TDS (SDQ)	19.5	6.9	17.4	6.5	17.6	6.2	0.95	0.39		

TDS : Total Difficulties Score, SDQ : Strengths and Difficulties Questionnaire

が167名 (57.8%) であり, どの項目についても4割以上が「少しある」または「かなりある」または「すごくよくある」と答えていた。全ての質問に対して「少しある」または「かなりある」または「すごくよくある」と答えた者は70名 (24.2%), 全ての質問に対して「あまりない」または「ない」と答えた者は75名 (26.0%) であった。

ii. 発達障害児の年齢層 (表6)

発達障害児の年齢を「5歳以下」, 「6~12歳」, 「13歳以上」の3群に分け, きょうだいへの問題行動の平均値を群間で比較した。意図的な身体的攻撃(「押す, 小突く」および「たたく, ける」)では, 「6~12歳」群の平均値が「13歳以上」群のそれより有意に高かった。TDS得点平均値について群間で有意差は認められなかった。

iii. きょうだいの年齢層 (表7)

きょうだいの年齢を「5歳以下」, 「6~12歳」, 「13歳以上」の3群に分け, きょうだいへの問題行動の平均値を群間で比較した。発達障害児からきょうだいへの不適切な言動・行動に関するすべての質問に対して, 「6~12歳」群平均値が, 「13歳以上」群平均値より有意に高かった。「からかう, いじわるを言う」, 「押す, 小突く」, 「たたく, ける」では「5歳以下」群平均値が, 「13歳以上」群平均値より有意に高かった。TDS得点平均値について群間で有意差は認められなかった。

iv. きょうだいの発達障害児との関係 (表8)

発達障害児から見たきょうだいの関係を「兄」, 「姉」, 「弟」, 「妹」の4群に分け, きょうだいへの問題行動の平均値を群間で比較した。「からかう, いじわるを言う」と「押す, 小突く」では, 「弟」群と「妹」群

表7 きょうだいの年齢層と問題行動

	きょうだいの年齢層						F	p	多重比較
	1 「5歳以下」 (n=72)		2 「6~12歳」 (n=140)		3 「13歳以上」 (n=77)				
	M	SD	M	SD	M	SD			
言語的攻撃									
ばかにする	1.4	1.5	1.6	1.4	1.0	1.3	4.57	0.01	2>3
からかう, いじわるを言う	1.8	1.5	1.8	1.5	1.0	1.2	8.89	0.00	1,2>3
身体的攻撃									
押す, 小突く	1.8	1.5	1.7	1.4	0.7	1.2	14.65	0.00	1,2>3
たたく, ける	1.4	1.3	1.5	1.4	0.8	1.2	7.72	0.00	1,2>3
迷惑行為									
いやがることをする	1.9	1.5	2.0	1.5	1.4	1.3	4.87	0.01	2>3
全般的な情緒・行動上の問題									
TDS (SDQ)	18.3	6.9	17.3	6.5	17.4	6.0	0.60	0.60	

TDS : Total Difficulties Score, SDQ : Strengths and Difficulties Questionnaire

表8 きょうだいの発達障害児との関係と問題行動

	発達障害児から見たきょうだいとの関係								F	p	多重比較
	1 「兄」 (n=49)		2 「姉」 (n=66)		3 「弟」 (n=90)		4 「妹」 (n=84)				
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
言語的攻撃											
ばかにする	1.1	1.3	1.1	1.1	1.6	1.5	1.6	1.5	3.82	0.01	3,4>2
からかう, いじわるを言う	1.0	1.2	1.2	1.2	2.0	1.5	1.9	1.5	7.91	0.00	3,4>1,2
身体的攻撃											
押す, 小突く	1.0	1.3	1.1	1.2	1.8	1.4	1.7	1.4	6.74	0.00	3,4>1,2
たたく, ける	1.0	1.4	1.0	1.2	1.5	1.5	1.5	1.5	2.49	0.06	
迷惑行為											
いやがることをする	1.4	1.4	1.7	1.3	2.0	1.5	1.8	1.5	2.94	0.03	4>1
全般的な情緒・行動上の問題											
TDS (SDQ)	16.9	6.4	16.9	5.6	17.0	6.4	19.1	6.9	2.38	0.07	

TDS : Total Difficulties Score, SDQ : Strengths and Difficulties Questionnaire

の平均値は、「兄」群と「姉」群の平均値より有意に高かった。「ばかにする」では、「弟」群と「妹」群の平均値は、「姉」群の平均値より有意に高かった。「いやがることをする」では、「妹」群平均値の方が「兄」群平均値より有意に高かった。TDS 得点平均値について群間で有意差は認められなかった。

IV. 考 察

1. 問題行動の頻度

全ての質問項目に対して「少しある」または「かなりある」または「すごくよくある」と答えた者は全体の24.2%を占めていた。また全ての質問項目に対して「あまりない」または「ない」と答えた者は全体の26.0%を占めていた。きょうだいの約1/4が発達障害児による言語的攻撃、身体的攻撃並びに迷惑行為をすべて経験していた。

上記の比率が発達障害児のきょうだいに特異的な数値かどうか知るためには、定型発達の同胞間に日常的にみられる諍いの頻度と比較する必要があるが、資料の蓄積は不足している。わずかに武田²¹⁾が小学5, 6年生を対象に、きょうだいげんかの頻度等について報告している程度であり、質問項目が異なることから今回の調査結果と直接に比較することは難しい。同様の質問項目を用いて年齢・性別を揃えた対照群調査を施行して確認する必要がある。

2. 発達障害児の全般的な情緒・行動上の問題

今回の調査では、SDQ の TDS 得点が high need に該当する発達障害児は、男子の61.0%、女子の66.7%を占めていた。対象年齢が異なるため直接に比較することはできないが、Moriwaki らが公立小学校と公立中学校の児童2,899名（7～15歳）に対してSDQを用いて行った調査¹⁹⁾では、TDS 得点が high need に該当する児童は全体の10%前後であったことを考えるとかなりの高率である。Iizuka ら²²⁾は大学病院の小児神経科を受診した6～12歳の高機能PDD患者30名およびADHD患者30名を対象にSDQを用いて調査したところ、high need に該当する児童は全体の68.3%を占めたと報告しており、本研究の調査対象が児童精神科の通院患者として情緒・行動面での大きな偏りがあるとは言えない。したがって今回の調査結果を、児童精神科あるいは小児神経科を受診する発達障害児とそのきょうだいについて、ある程度までは一般化するこ

とが許されるものと思われる。

3. 問題行動に関連する要因

i. 発達障害児の年齢

きょうだいに対する言語的攻撃では、「ばかにする」は3群間に平均値の偏りは認められたが、2群間に有意差は認められなかった（6～12歳の平均値が最も高かった）。きょうだいに対する身体的攻撃（「押す・小突く」と「たたく・ける」）では5歳以下の発達障害児と6～12歳の発達障害児の間に差は認められず、後者は13歳以上の発達障害児よりも平均値が有意に高かった。言語的攻撃は学童期をピークに次第に減弱し、身体的攻撃は思春期を機に減弱に向かうという傾向が想像される。今回のような横断的調査ではなく縦断的調査によって、発達障害児からきょうだいへの問題行動の内容・程度の経時的変化を明らかにする必要があるものと思われる。

ii. きょうだいの年齢

発達障害児からきょうだいへの不適切な言動・行動に関するすべての質問項目において、「5歳以下」群と「6～12歳」群の間には有意差がなく、「13歳以上」群では「6～12歳」群より得点が有意に低かった。きょうだいが思春期年齢に達すると発達障害児による問題行動が減少するものと推察される。成長に伴うきょうだい関係の変化に関する先行研究を通覧すると、子どもが思春期年齢に達すると、年上による年下の支配や世話が減少して両者はより公平な関係に移行する²³⁾、あるいは子どもが高校生以上になると競争意識やけんかは減少するという報告²⁴⁾があり、森川²⁵⁾はこれを、年齢的に自らきょうだいとの接触を選択することが可能となり、葛藤場面を避けることができるようになるためであろうと論じている。富永ら²⁶⁾は自閉症者の成人きょうだい10名に半構造化面接を実施し、自閉症児との経験を回顧するよう求めたところ、学童期に自閉症児の行動に巻き込まれたと話す者は10名中7名であったが、その体験が思春期以降も続いたのは1名であったと報告している。臨床場面でも、きょうだいの成長に伴い、自分に向けられる暴言・暴力に対して適切に対応できるようになり、結果として発達障害児の問題行動が減少することをしばしば経験する。

iii. きょうだいの発達障害児との関係

言語的攻撃について見ると、「ばかにする」では、「弟」、「妹」群の平均値は、「姉」群の平均値より有意

に高かった。また「からかう、いじわるを言う」では、「弟」、「妹」群の平均値は、「兄」、「姉」群の平均値より有意に高かった。身体的攻撃について見ると、「押す、小突く」、「たたく、ける」とも「弟」、「妹」群の平均値は、「兄」、「姉」群の平均値より有意に高かった。迷惑行為について見ると、「いやがることをする」では、「妹」群の平均値は、「兄」群の平均値より高かった。発達障害児の全般的な情緒・行動上の問題について4群間に有意差は認められないことから、発達障害児が自分より年下のきょうだいに問題行動（言語的攻撃と身体的攻撃）を向けがちであることが考えられる。

iv. 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義は、これまであまり注目されてこなかった発達障害児からきょうだいに対する日常的な不適切な言動・行動の実態を、一定程度明らかにしたことにある。発達障害児の臨床にあたり、きょうだいの年齢層や発達障害児との長幼関係が、問題行動の発現頻度に影響するという視点を持つことが、見過ごされがちなきょうだいの苦勞を見出し、サポートする契機になることが望ましい。

今回の研究対象者は、特定の医療機関に限定されていることから、結果の一般化には限界があり、また比較対照群を設定しない研究デザインであることから、十分な議論に至っていないという限界がある。今後は、健常児や発達障害以外の疾患・障害との比較に加えて、発達障害の種類ごとの相違や経時的な変化も踏まえ、対象数を増やして本研究の結果を検証していくことが必要と思われる。

V. 結 論

発達障害児からの言語的攻撃、身体的攻撃並びに迷惑行為をすべて経験しているきょうだいは全体の約1/4に認められ、個々の問題行動の発現頻度は発達障害児の年齢、きょうだいの年齢、および発達障害児ときょうだいの長幼関係により影響を受けていた。発達障害児が小学生年齢である場合ときょうだいが発達障害児より年下である場合に多く、きょうだいが思春期年齢だと少なかった。

謝 辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力くださいました保護者およびごきょうだいの方々に深く御礼申し上げます。また、データの分析にご協力いただきました脇坂陽

子さん（筑波大学非常勤研究員）に感謝申し上げます。

本研究は東京都都立病院臨床研究事業の助成を受けて実施しました。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 三原博光. 障害者のきょうだいの生活状況. 非障害者家族のきょうだいに対する調査結果との比較を通して. 山口県立大学社会福祉学部紀要 2003;9:1-7.
- 2) 大瀧玲子. 軽度発達障害児・者のきょうだいが体験する心理プロセス: 気持ちを抑え込むメカニズムに注目して. 家族心理学研究 2012;26:25-39.
- 3) 圓尾奈津美, 玉村公二彦, 郷間英世, 他. 軽度発達障害児・者のきょうだいとして生きる一気づきから青年期の語りを通して. 教育実践総合センター研究紀要 2010;19:87-94.
- 4) 浅井朋子, 杉山登志郎, 小石誠二, 他. 軽度発達障害児が同胞に及ぼす影響の検討. 児童青年精神医学とその近接領域 2004;45:360-371.
- 5) McKeever P. Siblings of chronically ill children: A literature review with implications for research and practice. American Journal of Orthopsychiatry 1983;53:209-218.
- 6) Breslau N, Weitzman M, Messenger K. Psychologic functioning of siblings of disabled children. Pediatrics 1981;67:344-353.
- 7) Schwirian PM. Effects of the presence of a hearing-impaired preschool child in the family on behavior patterns of older "normal" siblings. American Annals of the Deaf 1975;121:373-380.
- 8) Cleveland DS, Miller NB. Attitudes and life commitments of older siblings of mentally retarded adults: An exploratory study. Mental Retardation 1977;15:38-41.
- 9) Lavigne JV, Ryan M. Psychologic adjustment of siblings of children with chronic illness. Pediatrics 1979;63:616-627.
- 10) Harvey DH, Greenway AP. The self-concept of physically handicapped children and their non-handicapped siblings: An empirical investigation. Journal of Child Psychology and Psychiatry, and Allied Disciplines 1984;25:273-284.
- 11) Kendall J. Sibling accounts of attention deficit hy-

- peractivity disorder (ADHD). *Family Process* 1999 ; 38 : 117-136.
- 12) Harpin VA. The effect of ADHD on the life of an individual, their family, and community from pre-school to adult life. *Archives of Disease in Childhood* 2005 ; 90 : i2-i7.
- 13) 阿部美穂子, 神名昌子. 障害のある子どものきょうだいを育てる保護者の悩み事・困り事に関する調査研究. *富山大学人間発達科学部紀要* 2011 ; 6 : 63-72.
- 14) 難波 寿, 飯原 有, 岩橋 由, 他. 発達障害児のきょうだい児に対する攻撃行動への行動論的アプローチ—家庭場面への指導の効果の検討. *発達心理臨床研究* 2006 ; 12 : 133-141.
- 15) 熊谷恵子, 東原文子, 荻原喜茂, 他. 発達障害が基盤にある中学生の家庭内暴力に対する相談・援助 : 学習障害およびその周辺のこどもを中心に. *筑波大学リハビリテーション研究* 1999 ; 8 : 69-78.
- 16) The ICD-10 classification of mental and behavioural disorders. Clinical descriptions and diagnostic guidelines. Geneva : World Health Organization, 1992.
- 17) Goodman R. The Strengths and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, and Allied Disciplines* 1997 ; 38 : 581-586.
- 18) Matsuishi T, Nagano M, Araki Y, et al. Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) : A study of infant and school children in community samples. *Brain & Development* 2008 ; 30 : 410-415.
- 19) Moriwaki A, Y Kamio. Normative data and psychometric properties of the Strengths and Difficulties Questionnaire among Japanese school-aged children. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 2014 ; 8 : 1.
- 20) 川喜田二郎. 発想法—創造性開発のために. 東京 : 中央公論社, 1967.
- 21) 武田 京. きょうだい関係と性格特性に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 1995 ; 5 : 179-190.
- 22) Iizuka C, Yamashita Y, Nagamitsu S. Comparison of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) scores between children with high-functioning autism spectrum disorder (HFASD) and attention-deficit/hyperactivity disorder (AD/HD). *Brain Development* 2010 ; 32 : 609-612.
- 23) Buhrmester D, Furman W. Perceptions of sibling relationships during middle childhood and adolescence. *Child Development* 1990 ; 61 : 1387-1398.
- 24) 磯崎三喜年. 出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響. *国際基督教大学学報. II-B, 社会科学ジャーナル* 2007 ; 61 : 203-220.
- 25) 森川 夏. 家族システム論の観点から見た青年期のきょうだい関係に関する基礎研究. *東北大学大学院教育学研究科研究年報* 2014 ; 62 : 133-143.
- 26) 富永恵美子, 松永しのぶ. 自閉症者の成人きょうだい—同胞との関係の変遷—. *小児の精神と神経* 2013 ; 53 : 245-257.

[Summary]

The purpose of this study is to investigate the actual condition of problem behaviors by children with developmental disorders towards their siblings. Original questionnaires were sent to parents of 1,980 children with developmental disorders, to which 289 mothers of children ages between 3 and 19 answered. About three-fourth of the siblings were targets of at least one of problem behaviors such as verbal aggression, physical aggression and nuisance behaviors. Physical aggression was evident among children with disabilities ages between 6 and 12. Sibling ages above 12 experienced less aggression by children with developmental disorders, who were prone to aggression towards their younger siblings.

[Key words]

developmental disorders, siblings, verbal aggression, physical aggression, problem behaviors